

# 第1章 学級経営よもやま話

## 第1節 学級開き

最初に申し上げておきますと、「教育の森」の配信は、必ずしも目次順にはなっていません。これは、より身近で具体的な内容を先にお届けし、やや理論的なものを後半にお届けするという編集方針によります。さらに、最初の4回は年度当初の実利的な内容をパッケージしています。この間の配信が月刊ではなく週刊になっているのも、4回分で1つと考えているからです。それぞれに「学級開き」「学級目標」「家庭訪問」「学級通信」とタイトルを付けていますが、ひっくるめて「学級経営最初の一歩」というイメージで構想しています。

この節は、

- 学級開き(第一声)■
  - 君ひとの子の師であれば■
  - 教室は「ジム」か「ホーム」か■
- の3つの項から成っています。

### ■学級開き(第一声)■

新しい年度の始業式の日、クラス編成替えや担任発表のあと、担任と子どもたちが学級教室で最初に出会う場面が「学級開き」です。そして、そこで担任が子どもたちに向けて最初にする話を「第一声」とよんでいます。

ところで、『人は見た目が9割』(2005年刊)や『人の印象は3メートルと30秒で決まる』(2008年刊)といったビジネス書をご存知でしょうか。タイトルだけでおよその内容は見当がつくと思いますが、第一印象が大事だということを縷々述べた本です。この手の本は結構売れるようです。

新年度の始業式の日の子どもたちとの出会いの場面です。先ほどの本のタイト

ルを、「担任は見た目(第一印象)が9割」「担任の印象は3メートル以内の距離に近づいた30秒で決まる」と読み替えると、学級開きの第一声の持つ意味が理解できると思います。

2つ補足を加えます。まず、子どもたちとは去年も顔を合わせていて、お互いによく知っていると言われるかも知れません。顔や名前を知っているということと、ぼく(わたし)の先生として見るのでは、その意味合いは全く違います。

さらには、子どもに媚びる必要はないと考えられるかも知れません。媚びているのではありません。私たちの行う教育は、子どもたちから好意的に受け入れられて初めて成立するのです。

学校によっては、離着任式や教科書配布等々で時間を費やし、学級開きの時間が10分か15分程度という場合もあります。それでも、最大限のエネルギーを注いで準備をし、その時を迎えるべきだと思います。

ぼくの場合は、

- ①子ども一人ひとりの名前を読み上げる。(時間があれば短い言葉を添える。)
- ②学級通信第1号を配る。その中で、次の2点を伝える。
  - ・自分の立ち位置
  - ・教育方針

2008年度の学級開きの通信の前半部分を紹介します。



きょうから6年生。最高学年のスタートです。

みなさんのなかまに入れてもらうことになりました草尾です。どうぞよろしくをお願いします。

5月22、23日の修学旅行が間近に迫ってきました。7月3、4日には、野外学習があります。たくさんの楽しみが待ち受けています。同時に、学校生活のあらゆる場面で今までにない責任の重さも待ち受けています。

ぼくは、学校がだれにとっても楽しい場所であってほしいと思っています。安心して自分を出せる場所であってほしいと思っています。そして、28人の一人ひとりが思いっきり輝く場所にしたいと思っています。そのために、3つの「約束」をします。

○楽しいクラスを作ります！

○いじめやなかまはずれを許しません！

○弱い人の味方になります！

「楽しさ」には努力が必要です。みんなで力を合わせて、どんな「楽しさ」を作れるでしょうか。ワクワクします。そのためには、どんな理由があろうともいじめやなかまはずれを許さないという、クラスのルールを確立しなくてはなりません。ぼくはその先頭に立って努力します。さらに、算数が弱い人には算数で、力が弱い人には力で味方になります。一緒にがんばりましょう。

少しロングに捉えると、最初の1週間あるいは各教科の最初の時間までを「学級開き」期間と見ることもできます。例えば自己紹介の仕方、例えば最初の学活、例えば最初の国語の授業などなど、勝負をかけていますか。

3つ紹介します。

《事例1》は、1986年4月8日の教師通信「教育雑記帳」No.1から、3年生の学級開きに関するものです。（「教育雑記帳」については別の機会に触れます）

《事例2》は、同じく4月9日付「教育雑記帳」から、最初の授業に関するものです。散歩とセットになっています。

《事例3》は、2009年の最初の授業ネタです。4年生で学級崩壊を起こしていたクラスの5年スタート時のものです。子どもに学びの楽しさを伝えるとともに、教師の方を向かせることを狙っています。

《事例1》

## 学級びらきはまず“散歩”から

明日、9日あたり、学級全員で“散歩”に出かけませんか。出かける場所はどこだっていいのです。川のほとりでも、桜の花見でも、それは担任の好み次第。1時間でも、2時間でも、時間をおしまずにやってみてください。ぼくらが思っている以上に、子どもにはうけるのです。散歩したあと、作文を書かせるとか、日記を書かせるとか、何もしないと、それはご自由に。

# こんな自己紹介いかがですか

アクロスティックの自己紹介です。名前をおりこんで詩にするのです。

たとえば

|   |              |
|---|--------------|
| A | のんびり一歩       |
|   | むりせず三歩       |
|   | らくらくあるけ      |
|   | あおい空         |
|   | きたもみなみも      |
|   | こどもでいっぱい     |
| B | ふといのりまきの     |
|   | あったかいむしぱんのむ  |
|   | しょっぱいらーめんのだら |
|   | つめたいあいのすのあ   |
|   | あまいきんときのかき   |
|   | にがいこーひーのこ    |

AよりBの方が易しそうです。内容はウソであってもかまいません。前日に例を示して宿題にしては？9日か10日あたりにやるといいですね。最初に教師がやること。作品をあとでプリントしてやれたらたのしいですね。

## 《事例2》

国語の最初の授業にこの詩はいかが

### 春の歌 草野心平

ほっ まぶしいな  
ほっ うれしいな  
水はつるつる  
風はそよそよ  
ケルルン クック  
ああ いいにおいだ  
ケルルン クック  
ほっ いぬのふぐりが咲いている  
ほっ おおきな雲が動いている  
クッ クッ クッ

ケルルン クック

ケルルン クック

## 授業案

この授業は、大阪の山本正次さんに教えていただきました。

### ①詩をかく

教師、黒板にかく。それを見て子どもはノートに。

### ②よむ(できるだけたくさん)

- ・教師だけ
- ・教師と子ども
- ・子どもだけ
- ・ノートを見て

### ③かんがえる

T 「それじゃききます。この詩は、春の歌っていうんですね。春がきてどうしてんの？」

C 「よろこんでる」「とってもよろこんでる」

T 「春になってだれがよろこんでいるのでしょうかね」

C いろいろ出る

まぶしい……冬眠からさめた

ケルルン クック……かえるのなきごえ ⇨ カエル

ほっ まぶしいな…カエルが冬眠からさめた。「ほっ」はおどろき。

ほっ うれしいな…はじめはまぶしくて何も見えなかったけど、生きていてうれしかった。

水はつるつる…水にとびこんだ。つるつる＝水がぬるんでいる

風はそよそよ…春の風

ああ いいにおいだ…やっとなおいを感じた。春のにおい。

ほっ いぬのふぐりが咲いている…ふと気がつくと、犬ふぐりの花(犬のこうがんの形につぼみが似ているのでそういう名前が付いたそうです。)が咲いている。

カエルが犬ふぐりの草の下から上を見ると、犬ふぐりの花が咲いていたわけだ、などと言いながら、実物を見せる。

ほっ おおきな雲が動いている…犬ふぐりの花のかなたに空が見える。

そこを、大きな雲が動いている。

以下のなきごえ…春のよろこび

#### ④よむ

斉読、ひとりよみ、教師のよみ…できるだけ多く

#### ⑤そらんじる

行のうしろの方から消し、少しずつそらんじる量を増やしていきます。子どもがとってもよろこびます。(具体的には必要に応じて聞いてくださればお伝えします)

#### ⑥かんそう

詩の感想や授業の感想を書く。

※2時間連続の授業案です。

### 《事例3》

## 出会いの授業をつくる

2009. 4

### 【算数①】

■問い 答えが463になる2けた×2けたのかけ算を探してみましょう

※463は素数だから正解はない

※子どもに伝えること

- ◆算数の学習も、一度に正解に達しなくてもよいということ
- ◆そのためには試行錯誤の活動を気軽に行うのがよいのだということ
- ◆さらにそのときの記録は間違っているものも残しておくこと
- ◆正解の数に次第に近付くということも解決の方法であるということ
- ◆ひとつの解決策にもいろいろな方法があるということ
- ◆答えがないという問題も算数にはあるということ

### 【算数②】

■今年1年の算数運を決めるおみくじをします

■ノートにおみくじの方法を書きながら進めましょう

①2けたの数字を思い浮かべて書きましょう 例32

②その数字の十の位と一の位の数字を足してください 例3+2=5

- ③そこで出た数字を最初の2けたの数字から引いてください 例  $32 - 5 = 27$   
 ④表を見に行きます。計算して出た数字のとなりにある言葉があなたの結果です  
 ※9から81までの数字の横に「大吉」「小吉」などと書いた表を用意しておきます。

### 【国語①】

1年生の漢字表を配る

- 課題① 縦の列のある8字の漢字をすべて使い、なるべく短い1文を作りなさい
- 課題② 80字の漢字を組み合わせて、40組の2字熟語を作りなさい。

### 【国語②】

いたいな 木島始

ヤツデのはっぱ むしった  
 おれのゆびさき わるいやつ  
 いつになったら なおる？  
 はるがきたら また しげる

チエのきもち うらぎった  
 おれのころ わるいやつ  
 いつになったら なおる？  
 おもいだすたび

トカゲのしっぽ ちぎった  
 おれのかかと わるいやつ  
 いつになったら なおる？  
 なつがきたら また のびる

- 空蘭  に合う言葉を入れなさい。(原作は、「また いたい」)  
 ※心のキズは容易に治らない。ちょっとした話を添えましょう。

## ■君ひとの子の師であれば■

君ひとの子の師であれば  
 とくにそれはごぞんじだ  
 あなたが前に行くときに  
 子どもも前を向いて行く  
 ひとあしひとあし前へ行く

あまりにも有名な、故・国分一太郎さんの1951年の著書『君ひとの子の師であれば』の巻頭のことばです。若い頃にこの本に出会って、最初のフレーズは何かの拍子に今も口を突いて出てきます。しかし如何せん古い本だしなあと思っ  
ていたら、少し前(2013年1月)、復刊の新聞広告を見ました。今も需要があるよう  
です。ならば、その本の中から「誕生日」という一文を紹介したいと思います。

## 誕生日

……4月になったら、新しい受け持ちになった子どもたちの誕生日を、忘れずに  
記録しましょう。日記やポケット・ダイアリーの、それぞれの日付のところに、「だ  
れそれ生まる」とかきこむのです。4月12日、佐藤健太郎生まる、5月3日、  
進藤ヒデ子生まる、5月25日、山田一郎、鈴木春子生まる、というように。妻  
や子どもや、きょうだいのあるひとは、それもいっしょに。

そうして、どうするということでしょうか。

4月12日の朝、教室にはいる前に、かならず、その豆手帖をひらきましょう。  
「おお！あのはずかしがりやの佐藤健太郎生まるか！」

教室にはいって、朝のあいさつが終わったら、

「きょうは、佐藤健太郎君が、この世のなかに生まれた日ですね。佐藤健太郎君  
のいのちのはじまりの日ですね。みんなでお祝いしてあげましょう。さあ、おめ  
でとう。手をうって。」

と、パチパチ、でこぼこ顔で、はずかしがりや、まともにこっちもむかれない、  
その佐藤健太郎を祝福してあげましょう。

たとい、そのクラスでは、その月誕生の人びとのため、まとめて祝ってやる誕  
生会といったものが、自主的におこなわれていたとしても、その日はその日で、  
教師のまごころを、簡単に示してやりましょう。1、2年ぐらいなら、かねて用  
意の造花でも、その日生まれの子どもの胸には、その日いちにちさしてあげても  
よいでしょう。

……

……これは、ひとりひとりのいのちを、かけがえのないものとしてだいじにする、  
わたくしたちの人間教育からいっても、たいせつなことだと思われます。日本国  
の象徴である天皇の誕生日を祝うことよりも、もっともっと、みぢかなことだ  
と思われます。

あなたはお気づきになっていませんか。

4月はじめは、なんど、子どもの生年月日を、帳簿やカードや紙片にかきつけ  
ることでしょうか、……。

ひとのいのちを、ことのほか大切にするわたくしたちは、こんな生年月日の数



字をも、たんなる数字ではないとりあつかいをしたいと思います。

まして、その子が、ガリレオやマダム・キュリーと同じ日の生まれだというようなときには、ガリレオやキュリー夫人のお話をして、うんとはげましてやりましょう。

1951年と言えば、戦後すぐのころです。今とは何もかもが違いますが、子どもを育てるといふ営み、教師のありようなど本質的なことは不変です。「不易」と「流行」で言えばまさに「不易」中の「不易」の部分です。時代を超えた若い教師へのメッセージです。ご一読を。

## ■教室は「ジム」か「ホーム」か■

「ジム」というのは“鍛える所”、「ホーム」というのは“ホッとできる所”という意味です。教育の場では、学校を「ジム」に、そして家庭を「ホーム」に例えて、両者の役割や連携を語られることが多いです。

教室が「ジム」か「ホーム」かなんて自明の理、にも拘わらずかくの如き表題に至ったのにはワケがあります。結論から言うと、現在の私は、子どもにとって教室は「ジム」であると同時に「ホーム」でもあると考えています。

いつの頃からか、家庭が子どもにとって必ずしもホッとできる場所ではなくなってきました。親の前でいい子を演じる一方、学校で崩れてしまう子がいます。塾や習い事に追われ、学校が休憩場所になっている子がいます。さらには、親になりきれない親もいます。最初は稀であったものが、今や珍しい事例ではなくなりました。家庭と学校の役割と言うは易いが、親の価値観は学校第一で揃っているわけではありません。そうした時代の教室は、「ジム」と「ホーム」の両面を持つしかありません。

教室の「ジム」機能については述べるまでもありません。ここでは、「ホーム」としての教室を考えます。

私は、出勤すると、できるだけ早く教室に行きます。そして、夏場は窓を開けて涼しい空気を入れ、冬場は暖房を入れ電気を点けて子どもの登校を待ちます。教師用机のイスに座って本など読んでいるのが通常のパターンで、教室に入って

きた子どもに「おはよう」と声を掛け迎えます。…心がけて続けているのは、ただそれだけです。

子どもの頃、家に帰った時に明かりが灯っていた安心感、「ただいま」と言った時に「おかえり」と声が帰ってきた安心感を味わったことはないでしょうか。私は、「おはよう」に「今日もよく来たな。おかえり」という気持ちを込めています。そこで暫くの時間を過ごしながら、「ジム」に向かう態勢を整えているのです。